目次に戻る

美術教育への誤解払拭に向けて（PartⅡ）

― 3H美術教育の理念を基底に ―

Toward Sweeping Away Misunderstandings of Art Education (Part II)

Based on the Idea of 3H Art Education

若　元　澄　男・半　　直　哉[1]・田　中　真由子[2]

Sumio WAKAMOTO，Naoya NAKABA and Mayuko TANAKA

キーワード：図画工作（美術）科教育法・子どもと表現Ⅱ（造形）・スタンダード

ムナーリ・メソッド・シルバーナ・スペラーティー

はじめに

よりよい美術教育をつくるための最優先かつ絶対条件は，優れた教師等の存在である。したがって私は，精度や確度のことはさておき，自らの“経験”と“勘”をたよりに“美術（図画工作）科等担当者スタンダード[3]（以下，“スタンダード”と表記する）”の策定に挑んだ。

美術（図画工作）科等担当者スタンダード（改訂2012.11.28）

	Heart/Head/Hand （取り込む，引き込む，入れ・外へ・又は関係性や活動内容）	Memo （注）
「美術の教育」の具現 《Education for Art》 自分流 みる・かく・つくるを 遊ぶこと (a)	□ “美術（アート）…”について子どもたちに分かりやすく説明できる。 □学習指導要領等（幼稚園教育要領，保育指針）に示された「内容…」について過不足なく理解し指導内容・方法を構築できる。 □教科書等に掲載されている材料・用具の例や種，あるいは技法等に関する情報提供，五感覚複動為探索…各保育・授業・指導目標ねらい…毎につけさせることができる。	～ 学習指導要領（「解説」も含む）や小学校（図画工作科）及び中学校（美術科）の教科書に掲載されている事項等については説明できる。 ・・「内容」は，“美術（みる・かく・つくる）”を指し，子どもたちにとっても身近な，目的性，造形遊び的ふいは鑑賞ずくのような題材をもつつの説明ができる。指導にあたっては正反対のスタンスをめざのられる面白もあり子どもへの作用をふまえた指導を構築できる。 ・・人間形成（陶冶成）への関連性も，子どもたちが，より多く感じ視，聞，嗅，味，触の五感／脳の部み，より多く考え（脳の部み），より多様な部分をもんだ分を（部関で）できる技量（造形理論の部関）ができる。 ・・単に作品づくりに向かわない（造形遊び）等を積極的に取り入れ鑑賞教育9年間を見通し教師の技実（自分が好みレベル）ベースの授業・指導の指針等は設定できる。
「美術による教育」の具現 《Education through Art》 表現と 鑑賞通し 人つくる (b)	□ 「表現及び鑑賞の活動を通し…」で記される教科目標の「通し」の意味…を反映した授業を構築できる。 □美術教育の本質的目的が「感性」や「情操」レベルにとどまるものではないことを認識し“鑑賞教育”や“美術教育”との次元に差がしない見識…をもつ。誰のため，なんのための美術教育かを不断に追究できる。 □美術教育の内容の目的は人間形成（陶冶成）であることを認識し，作品主義を排し過程重視…の評価を具体化できる。	～ “美術による教育《Education through Art》”の確認を基盤に，学校に美術教育が在ることの意味を人間形成の視点から子どもたちに説明で説得で具現できる。 ＜ 我々国には“主要教科”との不適切な差がある。“情操教育”等も不適切な差の一つ。美術教育の位置づけをそうした低レベルでとらえて安めることに異次元。美術を通して《Education through Art》感じる力，考える力，みる・かく・つくるの力形成することを本質とする視座。 ＜ 作品をつくらせることが最終目的ではない。学校等における美術教育の目的は人づくり，作品のは実験之（作品主義）にこだわる教師達の必おのは美術及び教育の理解の浅薄，「はは」はらしく思は思らしく」からの脱却こそ肝要。
「新３H美術教育」の具現 ドロシーゴと 思いは一つ 子（個）の支援 (c)	□子どもたち個々の悩みをみきわめ，興味・関心度調査，表現は「ほめる，はげます，ひらげる（新３H）」励みができる。 □教師のイメージ共押しつけ求めさせ自尊・非否定し子どもたち自身の感性拡大できるよう位視野や材料の準備ができる。	＜ 「ドロシーと 思いは一つ 子（個）の支援」と謳んだのは，私のめざのスタンスが「子は個の鏡／ドロシー・ロー・ノルト 子どもが育つ魔法の言葉」内手研究所，2000年」に基づり美術にかかわる教員等にはとりわけ，このスタンスを要求したいと考えるからである。 ＜ 教科書の作品のようにカンコンクールで受賞したような絵（作品）のように描く（つくる）ことを安易に子どもたちに求める指導の否定。
「３M-美術教育」の具現 評価とは 見極めてこそ 子（個）にかえる 教師道 見極めることと みつけたり (d)	□子どもの現状（実態）をきちんと把握できる。 □作品の「出来映え（うまい・下手）」ではなく取り組み過程を＝みつめ・みきわり・みきわめて後，過程を重視した確かな評価ができる。	・・ 3Mとは「みつめる・みきわる・みきわめる」を指し，教育現場の基本，子どもの「いま」を確実に把握する。これが欠けては絵の中の子どもたちへの適切は「手だて」は見えてはこない。まず「みつめる」，現状観察をせずしばらく「みまもる」。そして情報に「みきわめ」，適切は「手だて（ほめる・はげます・ひらげる等）」を実行する。 ・・ みる・かく・つくるプロセスでのがんばりや個人差の有無等の評価ことのりがけ，このスタンスを要求したいと考えるからである。 ・・ 子どもが子どもたちはそのことの環境・大切さを体感し見方への連鎖が期待できる。
造形環境…の整備 支援とは ぬこかけても… ずはかけぬ… (e)	□「支援とは ぬこかけても ずはかけぬ」を最前に，子どもから事をとりあげ，子どもの作品に教師の事を入れる等の働行を容認できる。 □題材開発・教材研究等，不断の機興は当然，のことこと必要に応じて教師の参考作品（サンプル）等を制作（製作）できる。	＜ 造形環境には「環境（場・材料・用具）造形環境」と「不可視（人・時間・情報）造形環境」がある。詳細は，拙著『五七五 de 美術教育（図画工作・美術科重要問題100の実践問題）』明治図書2XXX年出版XXXX-XX。 ・・ 「ぬこかける支援」とは子どもの実態を見極め適不足のない造形環境を準備すること。その環境のやり子どもたちは多種な活動を展開しそのプロセスでの関与を期待する効果。 ・・ 「手をかけぬ」とは子どもの作品に教師の思いふみで手を入れる等の行為のが表示で表の表は設置すべきこと。「鑑賞の指導」においても「みかた」への入等置は重。 ・・ 題材の教材研究段階における試作等は不可欠。子どものつまづきなど想定で改定指導のポイント等の構築となる。
「もまた魂」の具備 肯定も 肯定…も もまた…ね 視野に入れ めだかもね すずめもまたね 豊々ヌヌ…で (f)	□ 美術教育における「不易（本質的課題）」を見失うことなく「流行（現代的課題）」「も」ふまえつつ子どもたちに適正な美術教育（題材開発，授業）・指導が出来る。 □教育（心豊貧民，目的表現，造形遊び）及び鑑賞のいずれ「も」かくべからざる時として認識でき，美術の自由性・を生かし，授業を構築できる。	～～ 江戸時代前夜の知見，「肯定也今プログラム」における授業時の教師の肯否の認識は「〇〇しましょう」が主流となり，「否定也今プログラム」は「〇〇してはいけません」となる。いずれの見解がより多くのこと性を生かければ良ならないけど，アメリカの教育プログラムと日本のそれを比較しようえでの江戸時代からの我が国の教育システムへの問題提起であった。 ・・ 「もまた魂」は教師の素質性を求める視点。「みんなちがってみんないい」の視点の具備と良い構えることもできる。肯否（受容）的問題も（題視）のなかで，子どもたちはぬ各ぬこから，諦を集かせ，自らを制力を，このプロセスで子どもたちは様々なことを自ら学び取る。 ・・ 「ぬこかけの学校」は子どもがベースを要現する授業の様子を象徴し，「すずめの学校」は教師主導で展開する授業の様子を象徴する。豊々ヌヌは，教師を自ら学ぶ与ら，ぬ豊貧性や造形遊び的指導は「めだかの学校」のようこあわりこく，目的表現の指導は「すずめの学校」がより適切なケースが多いだろうということ。 ・・ 具体的に学習指導要領等の様子を別表で各表現等を提案できる。 ・・ 「みんな違ってみんないい」，「目付況 みる・かく・つくるを 遊ぶこと」等，美術の自由性をベースにした授業の構築ができること。「豊貧性」，教科ではなく，十人匙ほど違りの結果を別表でできるスタンスを構持できる。

図－１：拙著“五七五 de 美術教育”
pp81-83 参照

左掲図－１（本小稿末尾／page12 に添付）のフォーマットで，数年前から世に問い始めている。が，明確な成果，反応，支持，反論等，残念ながら未だない。所詮，若元の“経験”と“勘”に基づいてつくったものなど一顧だにされないと言うことか。

かく自棄的な記述をするのは，私自身，私の“スタンダード”に関するなにがしかの確証があるわけではないからである。日夜，裏付けとなる，たとえば脳科学の知見等，意識して求め続けてはきた。が，明確に援用できるデータ等は未発掘である。

そうした折も折，ムナーリ協会会長シルバーナ・スペラーティを知ることとなった。彼女の美術教育の内容・方法及び理念を精査し，論構築できるなら，きっと私の“スタンダード”の妥当性は論証できる。と，あてにはならない私の第六感が働いた。

はたせるかな，“持論”は，おおむね是認されてしかるべしとの自己評価に至る。言わずもがな自己評価など世間には通用しない。したがって今回，“持論”の妥当性を明らかにするため行動を起こした。すなわち，シルバーナ・スペラーティを“優れた教師”のモデルとして位置づけ，教員仲間の彼女の実践に対する評価，あるいは学生の彼女の評価等々，可能な限り各層の所見を収集し，私の“スタンダード”と照合・対照する作業を試みたのである。“スタンダード”が必ずしも独りよがりではないことを明らかにするためである。

---

[1] 岩国短期大学
[2] 島根県益田市立益田小学校
[3] 拙著“五七五 de 美術教育”（自費出版）2014 年 2 月 2 日初版版，/http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hijiyama-u/

1　シルバーナ・スペラーティとの遭遇

それは，TV ／ BS1「奇跡のレッスン／世界の最強コーチと子どもたち／アートで人間を育てる」に端を発する。本年 2016 年 5 月 28 日の早朝。新聞紙面の「BS1」の放映番組の中に“アートで人間を育てる”との「タイトル」を確認。あるいはと習い性の“とりあえず録画”にて安心・忘却はいつものこと。ではあるが今回は直後の録画内容チェック。視聴開始から 50 分間，画面に釘付けとなった。この番組，私の策定した“スタンダード”の論証に活用できると予感。同時に，下手な言辞を弄する私の講義内容等をはるかに超える訴求力もある。是非，学生達には視聴させようと即断。のみならず私がかかわる全ての人達に紹介することも決心した。あとは走るのみ。常々学ばせてもらうことの多い我が友，半　直哉氏（以下，敬称略）にも当然ながら本プログラムを紹介した。後日，半からの謝辞と共に，「なにかの足しになれば」と番組内の言説・文言をつぶさに拾い上げたデータの提供を受けた。感謝の極み。シルバーナの言説のみならず画面のキャプションまでも明記されていた。クールな半のこの精細な「拾い上げ」こそがシルバーナ実践への評価に他ならないと受け止め，メール拝受直後，分担執筆を依頼した。

(1) 半　直哉メモ

以下は，放映されたプログラムから，半が拾い上げた，ほぼすべての言説・文言等である。メール拝受直後，私は“意図を持った作業”にとりかかった。すなわち，“スタンダード”に整合すると思われる言説等のすべてにアンダーラインを付す作業である。はたせるかな想定通り文面はアンダーラインで埋め尽くされた。次の作業は，各々の言説等が“スタンダード”の内包する“6 要件”のいずれに該当するかの仕分けであった。アンダーラインを付した言説の末尾に“第 1 要件”にかかわる場合は「(a)」を付し，“第 2 要件”は「(b)」となり，“第 6 要件”の「(f)」まで，順次付記の作業をした。シルバーナ実践と私の“スタンダード”の重なりの可視化を試みたものである。結果は想定以上，この「結果」への半の同意も得られ“スタンダード”への確信はより強化できた。ちなみに，“6 要件”は，(a)「美術の教育」の具現，(b)「美術による教育」の具現，(c)「新 3H 美術教育」の具現，(d)「3M 美術教育」の具現，(e) 造形環境の整備，(f)「もまた魂」の具備，である。なお，「図－ 1」の左列，各欄右隅の（a）～（f）は本小稿用に今回付したものである。

「奇跡のレッスン～世界の最強コーチと子どもたち～」シルバーナ・スペラーティ（イタリア）

【イントロ画像／キャプション】シルバーナ・スペラーティ（57）／ブルーノ・ムナーリ協会会長

○背中を押してあげれば，飛躍できる子どもがいる／○アートと言ってもその教えは，絵をうまくすることではない（b）／○自分の頭で考え，他人を尊重できる大人になれるよう教えていく（b）／○常識よ　飛んでいけ！　心を解き放ち　他人と歩調を合わせる（a，b）／○自分の頭で考える頭を鍛える（b）／○子どもに考える時間を与えないと，根っこのない大人になる（b）／○想像力はいったい何のため？（a，b）／○子どもたちの創造力を広げる（a，b）／○違いはみんなのために（d，f）／アートで人間を育てる（b）1 週間／アートが持つ真の力（a）を発見＊＊＊＊＊【1 日目】子どもたち（東京四谷の図工教室に通う小学生たち 2 年生から 6 年生までの 14 人）との出会い／○シルバーナ氏は，日本の指導者によって設定された「木ぎれ」を使った「造形遊び（木片を高く積み上げる）」の様子を声かけ等しつつ丁寧に観察（a，d）／○子どもへの「とてもいいじゃない」の声かけ（c）／○子どもが帰宅後，TV カメラの前で子どもたちの「積み木」に関する所見の披瀝／○目指すのは人と違うことに挑む心（b）／○第 2 日目のための「材料・用具」等の環境整備：作業台の配置等空間づくり。創作のためには徹底した準備。ペンや鉛筆などは，事前に一本一本自分で試す（e）＊＊＊＊＊【2 日目】○心を一つにする挨拶／○「発見」を促す。いろんなことを試して知らなかったことが分かって（c，e，f）／○あまり話したことのない子のとなりにすわって（b）／○「点と線」描く。基本中の基本（a）／○むやみに「やってみて」と放り出さず（c）必ず，技術を何通りか見せる。（軽く，強く，転がす等）（f）／○どれだけ違う点や線が描けるかを遊びの延長でやらせる（f）／○作品を並べ，じっくりみつめ違いを感じ取らせる（a，f）／単純なもので違いが出せれば想像は無限に広がる（c）／○「ムナーリ・メソッド」と呼ばれる五感を刺激する教育法（a，c）及びブルーノ・ムナーリの紹介／子どもたちに「観察」をさせる。そこからさまざまなことを「発見」させ，新たな知ったことを生かせるように，子どものころから考えさせることが重要（a，b）なのです。観察→発見→想像→ムナーリ流の考える力の鍛え方（b）。＊＊＊＊＊【3 日目】○一人ずつ教室に入り，昨日の自分の作品を見つけ，着席（e）／＜違いを整理

する＞／○カタログづくり（いろいろな点や線を種類毎に切り取り，本に貼る。（a，f）・・・違いを整理し自分を客観的に見直す。（b））／＜他人の作品を見つめさせる＞（a）／○友達の作品から「いいな。」と思うものをもらう。（大事なのは自分以外の作品をしっかりみつめさせること）（a）／＜お互いの作品を鑑賞する＞（a，b）／カタログを洗濯ばさみでつるし（e），鑑賞する（a）／自分以外の可能性が自分の可能性を広げる（a，b，f）＊＊＊＊＊【4日目】自然の中から発見しよう／○最初，自由に草を描く／○実際の草を見たりさわったりにおいをかいだり，五感をフル稼働させて違いを感じ取る（a，b）／「緑色」の「絵の具」の準備を忘れたふり（考えさせるため）（c，e）をして，子どもたちから「混色」のことを引き出し目の前で色を作る（a）／○長い紙の前に一列に並ばせ，一斉に草を描く。自然な流れの中で共同制作の様相に変化（a，b）／○「風が吹くよ」との声かけで場所を移動させ，他の子どもたちの草に新たに草を付け加えさせる（a，b）／○他の子どもが描いた草に，草をつなげるのみでなく虫も描かせる異質なものを受け入れ，個性を発揮する（b）／他の人のアイディアにヒントをもらうことで新たなアイディアが湧いてくるみんなの力を自分の力に自分の力をみんなの力に（b）／○親子で違いを感じる（e，f）／○保護者と一緒に桜見会／○親子一緒のレッスン（木の幹をフロッタージュ）（a，e，f）／○保護者との懇談（b）／シルバーナ・スペラーティの談話／「きれい」とか「うまい」といったほめ方を私はしません。どういうふうに作ったかを子どもと一緒にふりかえり，作る過程に着目して，ほめるのがいいと思います（b，c）。時間をかけて，子どもと一緒に観察し良さに気づいてあげることが一番です（d）。大事なのは，絵が上手か下手かではなく，自分で自分の作品を観察させることです。観察することで，いろいろなことが分かります。そして，新たに知ったことをつなげて考えを広げていくのです。子どもに考える時間を与えないと，根っこのない大人になってしまいます。感受性が育たないと，他の人と協力しあうことができなくなります。自分の失敗を受け入れられない弱い人間になってしまいます。子どもに何が必要なのか，大人も立ち止まって考えないといけませんね。（b）（※保護者からの「ホントに上手じゃなくても上手ねって言ってしまうがそれでいいのか」との親の本音の質問へのシルバーナ氏の回答）大人が止まれば子どもは進む＊＊＊＊＊【5日目】1枚の紙で何かを生み出す（a）／子どもたちに「一枚の紙」を示し「これは何？何に使うのでしょう？」と発問。子どもたちは，「折り紙」「描く」と反応。受けての発問は「でも，そういう常識は1回捨ててしまおう。飛んでいけ！」。1枚の紙で何かを生み出す。どのような音が出るか，どのような形に変化するのか，考えられることをしぼり出す。見方を変えればいろんな可能性に気づくことができる。実験と体験を繰り返しながら子どもたちは想像力（？）の森を歩く。世界中，どんな場所，どんなものからも新しいことを知ることができます。アンテナを張り続ければ広い視野をもった子どもに育つのです。（a，b，c，f）＊＊＊＊＊【6日目】紙の形から連想をする（c）／切り抜いた紙を示し，形だけじゃなく穴にも意味があるんだよ。ここから連想して絵を描いてみて。これまで覚えた技術を使いイメージ豊かに表現をしていく。自分の頭で考え，違いを楽しむ，その先に豊かな想像（創造）力がひろがるのです（a，b）。「ありきたりのモノが一つも無い。ほんとうに質が高いです」と，シルバーナ女史のつぶやき。タクトくんは「自己ベスト」と自己評価（b）＊＊＊＊＊【最終日】子どもが大人に制作過程を説明（b）／子どもたちの作品（1週間分）を，過程が分かるように展示，来訪した保護者たちに対し，作品発表会として子どもたち一人ひとりが分担し制作過程を説明言葉にできるくらい学んだことが自分のものになっているか（b）／○最後の課題，「人とのコミュニケーション」を上手にできるか。自分の家族以外の知らない大人との交流。言葉を尽くし懸命に思いを伝えようとする子どもたち（b）／○アートは人と人をつなぐ。「一つだけお願いがあるの。自分だけの考えを育てて想像力を膨らませてね。あきらめちゃだめだよ。（b）…チャオッ！」。一方子どもたち，「日本にまたきてね」「明日また来てほしい」とお送りする／○「子どもたちは新しいモノを発見し学んでいく」「奇跡は待つものではなく起こすもの」「背中を押してあげれば子どもたちは飛躍できる」とのナレーションで番組は終了

以上である。先述の通り，この作業を終えた時，私の“予感”は一歩“確信”に接近した。上記の通りほとんど全ての言説等に“アンダーライン”を付すこととなり，その末尾には“スタンダード”の“6要件”を無理なく付記できたからである。

2「奇跡のレッスン／世界の最強コーチと子どもたち／アートで人間を育てる」への各層の反応

本項では，当該プログラムを紹介した際の学生の反応や現職教員（校内・園内研修等にて）等から得られた所見等を援用しつつ持論の妥当性に言及したい。

（1）私の授業「図画工作Ⅰ（3セメスター）」の受講生のコメント集から

下掲のプリント（図2～5）は，当該プログラム視聴後，学生から提出された「レポート（メール提出）」を，いつも通り着信順の“コピペ”にてコメント集として配布。その一部（Page1からPage8／今回は全48page）である。学生たちはコメント集読了後，図－2の左列上部の「スペース」に肉筆（日々の積み上げこそが“美文字”への近道）にて各自の私見（図－6）を記入し，次時持参の手交提出を求める。おおよそ毎回負わせる学生とっては軽くない課題である。が，同時に私も重い課題を背負う。すなわち，各学生のコメントの中に可能な限り「茶々（私の見解）」をい

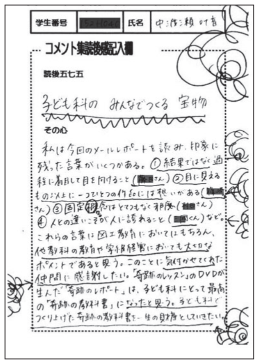
れたり，「若元の読後感，ひと言 (*^◇^)σ」等，私の見解の発信も心がけてきたからである。ちなみに，このコメント集返却の際の，“ひと言”は以下であり，学生のコメントを拾いつつ，シルバーナ実践と私の“スタンダード”を重ね合わせ“その”妥当性を明らかにすることを試みた内容である。なお，本小稿では，学生名はイニシャル（中渡瀬叶音以外／真筆）に変換し貼付した。

図－２／Page1-2

図－３／Page3-4

図－４／Page5-6

図－５／P7-8／
以降 p48 割愛



図－６／図 -2 の
左列上部拡大

若元の**読**後感，**ひ**と言（＊＾◇＾）σ（上掲図－２の左列下部から図－５の右列上部まで）／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

私，“当たるも八卦当たらぬも八卦”とばかりに，あるいは，もしやと思うTVプログラムは，なにはともあれ録画しておきます。録画以降，隙間タイムができた時，その内容をチェックするというのが習性化しています。

それはさておき，“美術による教育”を美術教育上の最優先課題とし，従前から標榜，訴え続けてきた私にしてみれば，**「アートで人間を育てる」**との文脈を含んだ今回のプログラム，きっと垂涎モノ（のはず）と予感，すわとばかりに録画予約をセット！しました。

なんだかソワソワし，今回ばかり（通常は，録画後，当分放置もアリ）は，録画直後に内容チェック！**大**当たり～ッ。と，**狂喜乱舞！**となりました。

なぜか。私自身の宿題解決の糸口を掴んだからに他なりません。私が百万言費やし，持論の「スタンダード（前掲図－1)」を，丁寧に逐条説明したとしても，あたりまえのことながら，現場経験のない君たちに，そして私の伝達能力の欠如とも相俟って，短時間ですべてを伝えることは困難と悩み，これが「重い宿題」となっていたのです。そんな折，このプログラムとの遭遇。プログラム全体を見終えた瞬間，私の悩みは雲散霧消。ほとんど持論と重なるこのプログラムを活用し私の言説と併用すれば，否，極論すれば，私がへたな言辞を弄さずとも，このプログラムの視聴だけでも，美術教育で大切なおおかたのことをきっと君たちはうけとめてくれるだろうと確信したのです。確信の根拠は，これまで君たちが提出してきた「保育所保育指針解説書」，「幼稚園教育要領解説」，「小学校学習指導要領解説図画工作編」，「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」等に関する「メールレポート」や「楽（落）書き」の徐々に高まる内容レベルの実態です。ということで，予定していたあれこれのことを差し繰り，2016年6月10日（金曜日）「図画工作Ｉ」の50分を視聴にあてました。突然，このプログラムを紹介することとなったこれが顛末です。

ところで私，今回の課題については，私的なレベルで「掛け替えのない副産物」を期待し当日に臨みました。以下，まず，その「**副産物**」のことにふれておきます。

この**先**生（シルバーナ・スペラーティ）の**生**き方・**あ**り方，あるいは，このプログラムを**通**底する理念は，提案者の私でさえそのクリアが覚束ない，年来の持論**“美術（図画工作）科等担当者スタンダード（私案）**／2012.11.1 改訂”の妥当性を裏付けてくれるとの印象を持ったのです。この印象が「副産物」につながります。すなわち，あるいは多くの人たちが**シルバーナ先生**を**スーパーティチャー**と認め，彼女のあり方・生き方がそれを支えるものであるとするなら，そのあり方・生き方からこそ，理想的な指導者のスタンダードが導き出されるのではないかと考えたわけです。であれば，逆に私の**スタンダード**(page4)を，「ものさし」に，シルバーナ先生にあてがってみたらどうだろうかとのイメージを描いたのです。私のそれが彼女のあり方・生き方と重なれば，あるいは，“私のスタンダード”の妥当性，信頼性がより確かなモノとして，私自身もとらえることができるようになるのではないかと考えたのです。同時に，現時点，おおよそ私見レベルのスタンダードであったとしても，そうした裏付けを蓄積していく中で，将来的にはコンセンサス形成につながるのではないか，のみならず私自身，より強力に提言できるようになるのではないか等々，あれこれの思いを巡らせました。とはいえ，私ひとりがいくら声高に，重複性や整合性があると叫んでみたとしても，その訴求力は微小と言わざるを得ません。

ではどうすればよいのか。この文脈を明らかにする方法はあるのか。**と**，ここで**ピカッチ！**でした。君たちへの「いつもの出（宿）題」と「いつもの受信（次週月曜日 20:00〆切)」が，**いつも以上**に楽しみになった瞬間でした。「早くコメントを受信したいッ！」，

君たちの反応・判断・印象・感想等々，どんな角度からでもいい，君たちの本音を聴きたいとの思いがつのりました。なぜなら，私のスタンダードと君たちの感性・知性がとらえたことを対照することにより，“私案（試案）”を我田引水レベルではないフィルターにかける絶好のチャンスととらえたのです。

と，そんな私的な思いを抱きつつ紹介したプログラムでした。はたせるかな，みなさんの多くは，期待した反応，否，期待以上の反応（コメント）を寄せてくれました。着信のあるたび，**「〇〇**くん，**でかした〜」**，**「〇〇**くん，**天晴れ至極ッ」**と，私は，PC の前でしばしば喚声をあげました。今回のみなさんのコメント，まさしく「核心（真）」に迫るパワーをさえ感じ，従前のレポート，「保育所保育指針解説書」，「幼稚園教育要領解説」，「小学校学習指導要領解説図画工作編」，「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の内容検討に関する**“やらされレポート”**とは，**雲泥**の**差**との思いを抱きました。これまでで，一番**多**く（ほぼ 100 %）の諸君が，一番**熱**く，一番**深**く，一番**広**く，全方位にわたって**感**じ･**考**えてくれたのではないかとの印象をさえ私は抱きました。あるいはこれこそが，スーパーティチャー・**シルバーナ**の**ご利益**だったのかもしれません。ぶらびぃぃぃ！シルバーナ！です。

それはさておき，ここでクールダウン。私の「スタンダード」のこと。自主的・主体的に，拙著“五七五 de 美術教育”を予・復習してくれた学生なら分かってますね。下掲の「図－ 1」がそれです。「なに！それって？」と思った君ッ！この際，自分の学修スタイルを猛省してくださいッ！

そんな不届き学生のことも考えながら，以下，数名の学生のコメントを引用・援用しつつ，一度，諸君を「スタンダード」の世界に引っ張り込みます。

以下，私の文面に目を通し，分からないことがあれば質問してください。大歓迎です。その後，ゆっくり，じっくり，仲間の**珠玉のコメント**を，熟読･精読，咀嚼し自分の見解をまとめ，これもいつも通り「冒頭のスペース」に，板書のつもりで**濃**く**美**しい**字**形，かつ**考**え抜き，推敲に推敲を重ねた文章で埋め尽くしてください。

実は，今回，君たちが，仲間から何を学び取るのか，これ**も**楽しみのひとつなのです。**と**，前置きはこのくらいにして本題に進みます。

えッ！誰ですか？いま**「ゲヘッ！**いまから本題ぃぃぃ？」ってつぶやいたのは？

****

“美術（図画工作）科等担当者スタンダード（私案）の 6 要件をふまえた
シルバーナーレッスンに関する私見（memo）

“美術の教育”の確認，私は容易でした。プログラム全編，さまざまな色・形が飛び交い，最終的には，ある男児が自らの作品を「自己ベスト」と位置づけ，誇らしい顔で TV カメラの前に立つ姿は，美術（アート）を満喫した姿の象徴と受け止められました。この「美術の教育」の視点から，学生のクールなそれを拾うなら，M・Y くんのそれが該当します。「かく・つくる」の前提となる「みる」に着目してのコメントでした。

> ビデオを視聴して，ずこうで最も重要なことは，鑑賞ではないかと考えた…（かなり前後の文字の割愛！ごめん（◎’д｀人）ゃ若元／ここ以降，学生コメントの引用・援用した文章の「割愛」や「一部のみ抜粋」等への「ごめん」は一切割愛します。ごめん）…自分の作品を鑑賞する力と，他人の作品を鑑賞する力，この 2 つの力を養うことで，自分や他人を客観的に見ることができ，自分の失敗や他人の失敗を受け入れることができるだろう。そのような人間を育成するためには，ずこうの授業を行うにあたり鑑賞の時間を大切にし，他人の作品，自分の作品を観察することが必要だろう。〈2016 年 06 月 12 日（日）14：41：31 発信〉

と，“美術の教育／ Education for Art”，とりわけ，「みる（鑑賞）」の大切さを忘れない心強いスタンスです。あるいは，M・M くんは，

> …あらゆるジャンルの活動を行っていて参考にしていきたいと感じた。あらゆるジャンルの活動をすることで，実際にビデオの中の子どもたちは感性や知性を養い成長を遂げていた。〈2016 年 06 月 11 日（土）22：46：34 発信〉

と，「あらゆるジャンル（過日のコメント集に出現した文言）」を用語し，「造形遊び」以外の「美術（アート）」に言及，「絵画」，「彫刻」，「デザイン」，「工作」そして「鑑賞」の指導内容及び方法が多様であるとの美術理解をベースに感性・知性を形成する結論への展開はうれしさ一入（ひとしお）でした。

“美術による教育”の文脈のこと。私はプログラムの随所で確認できました。でも，この際，私見はさておき，たとえば，O・H くんのコメントは，

> 最後に，自分達が作成した作品の紹介を，自分の親以外のまったく知らない大人に話すというのが大胆な発想だなと感じた。というより，日本にはない発想かな，と思った。〈2016 年 06 月 10 日（金）22：39：08 発信〉

と，クールに我が国の美術教育の実態に思いを馳せつつ，シルバーナ先生の授業最終日のことを取り上げてくれました。正装して保護者等に自分の営みについて屈託なく解説する姿は，まさに子ども達の成長を実感できるシーンであり，“美術による教育”の可能性を想起させる映像でした。このことについて，S・C くんは，こんなことばで綴ってくれました。

> 奇跡のレッスンを鑑賞して最強コーチのシルバーナさんは創作活動をすることで技術面を伸ばそうとしているのではなく，人間的な成長に重点をおいた活動内容や問いかけをしていて，シルバーナさんのレッスンを受けた 7 日目の子どもたちの姿には私にもはっきりと変わったなと感じとることができた。レッスンを受けて 7 日目の子どもたちは，自分の考えを周りにしっかりと伝える力が付き，自分と周りの子との違い良さを感じ，自分という存在に自信を持っているように見えた。〈2016 年 06 月 13 日（月）02：38：22 発信〉

さらに，子ども達の数日間の変化（変容）は保護者達の変化にも連鎖しました。余談ながら，このシーンから私は，子どもの変化は保護者の変化変容もうながすことを実感し，保育士・教師等の職責の重大さを再認識することとなりました。そしてこのこと，O・H くんのみでなく多くの学生が記述してくれていたことは私を幸せな気持にしてくれました。

“新 3H（ほめる・はげます・ひろげる）美術教育”の視点からは，M・I くんの記述の一部を援用します。

…個性を褒めてあげること，結果ではなく過程に目を向けてあげること，そうした指導者の働きかけ一つ一つがとても重要であるのだと学んだ…〈2016 年 06 月 10 日（金）21：21：16 発信〉

彼のこの記述をはじめとして，このことについても大多数の学生（72 名中〇名／〇%）などとすればよいのでしょうが時間の関係やそこまでしても精度があがったなどと軽々に言いたくないので割愛（カッツアイ）します。すまない。ともあれ大方の学生が「プロセス重視」の視点を確認してくれたことは，未来の適正な美術教育の展開に向かって，うれしく頼もしい限りでした。こうした諸君の見解の一つ一つが，私に対する我田引水の誹りを回避する材料になるのです。君たちの率直な見解を喜ぶ所以です。

“3M 美術教育”の視点では，M・M くんのレポートを援用します。

…学んだことが 5 つある。1 つ目は，子ども達のどんな些細な動きを見逃さないということである。……割愛……5 つ目は，評価のしかたである。ビデオの中で，あるお母さんが，「子どもの絵を，下手でも上手だと言ってしまう」という悩みに対して，子どもの絵を評価するのは，完成を見るのではなく，作る過程が大事だとシルバーナ先生はおっしゃっていた。作る過程を大事にすることで子どもはすくすくと想像力の種が成長していくのだと学んだ。以上の学びを受け，シルバーナ先生はとても偉大な先生だと感じ，シルバーナ先生のような，子ども達の無限の可能性を飛躍させる指導を行うことができるようになりたいと考えた。〈2016 年 06 月 10 日（金）21：51：45 発信〉

と，これも私のスタンダードの一つ“3M（みつめる･みまもる･みきわめる）美術教育”につながるうれしいコメントを送ってくれました。

“造形環境整備”の視点では，N・Y くんのコメントを援用します。

…教室の環境づくりでも様々な工夫がされていた。紙で作った作品を天上から吊るせるヒモがあったり，児童たちが横一列になって絵を描くことができる長い机，壁に作品を展示したりなどがあった。児童たちは作品を作るだけでなく，作りながらその空間を楽しんでいるようにも見えた。教室の環境づくりは，小学校の現場でも大切となることなので，これらの工夫を参考にして児童がのびのびと過ごすことができる教室づくりができるようにしていきたい。…〈2016 年 06 月 10 日（金）21：51：45 発信〉

と，彼をはじめとして，これも多くの学生がその大切さを確認してくれており安心しました。

“もまた美術教育”の視点は，F・M くんのコメントを援用します。

1 人でずっと美術をするのもいいが，交流し合うことで，友達のを参考にしたり，どうしてこう描いたのかの好奇心が溢れたれたりなど美術の良さが詰まってる〈送信日時　2016 年 06 月 10 日（金）21：15：06 発信〉

と，「もまた」の文脈でレッスンの展開をとらえてくれました。アクティブ・ラーニングを重ねてきた君たちだからこそ見極めることができたメリットかもしれません。

以上，君たちの視点からも，このレッスンが“3H 美術教育”の“スタンダード”の 6 つの視点のすべてを包含していたことが確認できたのではないでしょうか。私が，シルバーナ・スペラーティ先生に最大の敬意を表する所以です。

最後のシーン，なんど視聴しても，その都度，美術の力，教育の力等々を実感し，胸きゅん（これ齢のせいかな？）！となります。6 日間の美術のレッスンにも関わらずおそらくは，どの子どもの心にも，そしてどの保護者の心にも，この 6 日間のことは刻まれ，生涯の思い出になるだろうことを確信しました。

さて今回も，私の作用をきっかけに，みなさんの中で熱い熱い論争等が発生することを期待しています。なにしろ，**文**献や私の中に「見解」はあっても，「唯一の正解」などはありえないからです。自ら，感じ，考え**発**掘・**発**見・**創**造するしかないのです。**なッ！**

以上，**読**後感**ひ**と言でした！「え！ひと言ってなに？」という声がきこえてきそうです。**(◎’д`人)〃若元**

以上，この時のコメント集冒頭（前掲図 2 －図 5）に記載した私の“ひと言”をあえて無修正にて貼付した。平素の私の傍若無人とともに，私の“シルバーナ実践”への“見解”を表現したいと考えたからである。

（2）「図画工作科教育法（4 セメ）」受講学生影久みのり（「美術科教育法」受講済）コメント

ここで援用するコメントは，本学短期大学部美術科からの編入生影久みのりのものである。現在，“ずこうゼミ”に所属する学生の一人。常々，情報を冷静に処理する彼女の視聴後感である。

〇 VTR「奇跡のレッスン」を視聴して／シルバーナさんの純粋なものの見方というのは教育者としてだけではなく人としていいなと思えた。100 メートルの道のりの中に様々な発見がある生活を大人になるにつれてできなくなっている。この番組は全ての大人に見てもらいたいと思った。学ぶことや自分もこういう教育を受けてみたいという気持ち，保護者に語りかけるシルバーナさんの言葉にも泣きそうになった。しかし，それはどうなのかなと考えさせられる部分もあった。子どもたちの親が「意

外性のある人は魅力的だからそんな子になってほしい」というような発言をしていたこと，シルバーナさんがある女の子（マリンちゃん？）が，目の前にいる子がどんどんできていくことに焦って挑戦できずにいることや，目の前の子どもと同じようなものを作って“しまった”というような言い方（訳され方）をしていたところだ。意外性のある人というのは他の人とは違う考え方を持てる人ということだろうか。しかし実際には人と違うことをしてしまうと不思議がられる。どちらかというと，意外性，違いを認め，認められるような考え方を育てたいという言い方の方が個人的には好きだと思った。また，子どもも大人も他の人にはない部分を少なからず持っているもので意外性をわざわざ作り出すというよりはその他の人には無い考え方，個性をどう表現するかが重要なのではないかと感じた（これは先ほどの認め，認められる考え方に繋がる）。そして，目の前の子どもと比べてしまい挑戦できず，目の前の子どもと同じものを作ってしまったという女の子。もちろんシルバーナさんの本心がどんなものかは分からないし，もしかしたら否定的な意味では無かったのかもしれないが私には女の子のその作品が否定的に捉えられてしまったと感じた。作品から不安を感じ取ることも必要だが女の子が自分でその壁を乗り切ることも必要だと思う。実際，挑戦できずにいた女の子は友だちの作品から良いところをもらって成長しようとしていたように感じた。子どもの成長を見守るのと手助けをする微妙なラインが私にはまだよく分からないなと思った。／／／／／若元（＊＾◇＾）σ：う～～～～～～～～～～～～むっ！素晴らしいッ！クール！ワンダフル！ブラビィィィ！なにが？ってか！君が，私の紹介した事例を「鵜呑み」してないことです。是々非々のスタンスで，“ものごと”にかかわり，自分の納得するまで見極めようとする姿勢はどんな場合でも大切です。君のこの姿勢は生涯堅持してください。あるいは，君の“このコメント”，いま私が書いている文面に引用させてもらうかもしれません。その際は，無論，君の諾否は確認させてもらいます。（＊＾○＾＊）！！若元発信

と，あらかじめ援用を予告しており，本小稿執筆中，本人から「諾」との回答は得た。さて，この“影久コメント”を本気で読んだ学生は，シルバーナのメリットだけでなく，“モノゴトを鵜呑みにしない”ことの大切さも同時に学び取ったのではないか。

やや論はそれるが，ICT やアクティブ・ラーニングの最中，やや遠慮しながらの私の大量印刷・配布の営み。紙媒体で可視化して受け止めさせるねらいもある。では，“紙媒体”で学生は“影久コメント”や“私のひと言”を熟読･精読するのか。私は楽観していない。「賑やかなだけのアクティブ・ラーニング」を自戒するのと同じレベルで「静かなアクティブ・ラーニング」においてもいい加減な姿勢を認めない装置は不可欠である。あるいはそれがアクティブ・ラーニングの本質とも考える“脳働（能動）学習”を私は組み込んでいる。すなわち，同じクラスの受講生全員のコメントに対し“赤ペン活動”を要求する。全員のコメントへの各学生の赤ペン活動終了後，常設展示ボードに垂下公開する。こうした強硬（制）措置は，教員等養成の場において「学習指導要領（教育要領，保育指針等）に書いてあるから実践する」という低次元の学生を生み出さない“装置”であり“脳働（能動／アクティブ）学習”を求めるからに他ならない。

なお，この際である，このプログラムにかかわる“杞憂”も付言しておく。目を見張るほどのシルバーナ実践である。ゆえにこそ“鵜呑み”への警鐘をあえて発信しておきたい。またぞろ表層的な「スキル」のコピーに終始する教員・保育士を生み出しかねないからである。当該プログラムがオンエアされて以降，これは大きな懸念材料の一つである。「シナリオ化された描画指導法」や「マニュアル本」を安易に現場に持ち込む我が国の教育・保育現場の実態を考え合わせれば，このプログラムのすばらしさは，一方では，おおきな危険性を孕んでいると言わざるをえない。とりわけ，後日，シリーズ扱いで「Part Ⅱ（2016 年 6 月 18 日 BS1）」として放映された内容は，その思いを増幅させるものであった。おそらく編集者は，「教員等の視聴」を意識，「教員等のため」と「善意」の「それ」だったに違いない。まさに「ノウハウ」を抜粋した組み立てだったのである。これは編集者の「美術教育」への「誤解（「かく・つくる」が美術）」を想起させる。こうした事実を目の当たりにするにつけ，私の“杞憂”であることを願うのみである。なお，シルバーナの発する言説の中にさえいくつか支持できない内容もなくはなかった。私の「誤解」かもしれないことを付記しつつあえて付言しておく。

（3）田中　真由子（小学校教員／育休中）のシルバーナ実践への見解（若元から執筆依頼）

私の“杞憂”を吹き飛ばしてくれる見識もある。私は本小稿冒頭，当該プログラムは「下手な言辞を弄する私の講義内容等をはるかに超える訴求力。是非，学生達にも視聴をと即断。否，私がかかわる全ての人達に紹介しよう…」と記した。この文脈に広島大学の卒業生，現在，島根県の小学校教員田中真由子氏を巻き込んだ。“当該番組”に関する視聴後コメントを依頼。控えめな性格から「感想」との位置づけでの参加を得た。曰く

（略）今回は，パソコンにて，感想を書かせていただきます。お許しください。感想として，シルバーナさんから学んだことを 4 つ挙げていきます。

1.『よく観察する』

シルバーナさんのレッスンは，大まかに言うと「よく観察する」「試す･発見」「表現」の流れであったと思います。筆，草，紙，自分の作品，友だちの作品といろいろなものを観察していました。無意識に接していたものや，無意識で決めつけていた考えを洗い出し，意識の世界にもってくるという作業です。洗い出すためには，五感を使ったり，展示することにより客観的にみたり，自分のそもそももっている考え方と新しく得た考えを比較したりするなどをしていました。

このよく観察するということはとても，素晴らしいものだと思いました。（片付け本を書いている近藤麻理恵さんも「モノをよく見よ」と書いています。通ずるものがあります。）

「筆」というものをよく観察することで，たくさんの技を編み出しています。無意識に行っていた「筆で色を塗る」ということを意識の世界にもってきています。そして，こんな塗り方があるんだと発見しています。図工の中で技を編み出す，発見するということはしていても，それがどういう意味をもつのかは考えたことがありませんでした。

この考え方は，「筆」などのモノだけにとどまりません。

この DVD を見て，最初に私がしたことは，自分の時間の使い方を全て書き出してみるということでした。つまり，自分の今の生活を「よく観察」してみたのです。今まで，「新聞をだらだら読まない」「スマホでネットをしない」という目標をたてても一向に改善されませんでした。現状をよく観察しないままに立てた目標は，目先の欲求によって達成できずに，本当にやりたいことができないあせりとだめだと思う自己嫌悪しか残りませんでした。しかし，よく観察することで，スマホや新聞は時間の無駄とせずに，時間を別に取ってみるという解決策も発見できました。また，どうして，これをしたいのか，必要なのか，どんな生活を理想としたいのかなど，いろいろ考えることになりました。

DVD の中でもけいくんという子が自分の作品をよく観察しながら，今までとは違う描き方を試していました。それは，丁寧に，細かい線を重なるように描く方法でした。そのことにお母さんが気づいていました。素晴らしいと思いました。「よく観察」することによって，よく考えるようになります。それは，周りの人にも影響を与えるようです。

2.『シルバーナさんの考えから，彼女の生き方そのものが伺える』

◇シルバーナさんが番組の中で以下のような言葉を発しています。

・きれい，うまいといったほめ方を私はしません。どういう風に作ったのかを子どもと一緒に振り返り，作る過程に着目してほめるのがいいと思う。時間をかけて子どもと一緒に観察し，良さに気付いてあげることが一番

・自分の頭で考え，他人を尊重できるように教えていく。

・子どもに考える時間を与えないと根っこのない人間になってしまう。

・感受性が育たないと他の人と協力し合うことができなくなる。自分の失敗を受け入れられない弱い人間になってしまう。

・世界中，どんな場所，どんなものからも新しいことを知ることができる。

・アンテナを張り続ければ，広い視野をもった子どもに育つ。

これらの考えのもと，シルバーナさんは，子どもたち，親に関わり，言葉を発しているように感じました。シルバーナさんのレッスンの中での様々な細部へのこだわりも「なぜこうするのか」を繰り返すと上にあげた考えに行きつくと思います。

◇シルバーナさんの細部へのこだわり

・道具，材料をこだわって選んでいる。材料でさえも大事に扱っている。

・レッスンが行われた空間が美しい↔対比して，図工教室は雑然としている。学校の図工室もあのような感じでは？

・子どもたちにどんなことを学ぶのか，レッスンの始めに言葉で説明している。

・あまり話したことのない子の隣に座ってね。→友達に対する新たな発見を促す。

・子どもも大人も正装で美術館→子どもの作品に対して敬意を示しているかのよう

・子どもたち一人ひとりが担当を受けもち，制作過程を発表，質問への対応→目指しているものが，図工の「先」にあるので，このような活動も発想しえるのでは。

・いろいろなレッスンで親も巻き込む。→子どもにとって一番身近な仲間であることを意識している。親の考えを変えることも意識している。

図工ゼミ会（若元注：彼女及び彼女の同級生達が夏休みのある一日、比治山大学に参集する会）でも，図工の授業で子どもたちに教師がどのように対応するかが，話題に上りました。一つひとつ対応を考えていくことも大切ですが，それでは，マニュアル化してしまう恐れもあります。なぜ，そんな対応をするのか，もとになる考え，さらにそのもとになる考え・・・と考えていくと，その人自身の生き方にも行きつきます。
シルバーナさんのレッスンを見ながら，マザー・テレサの次の言葉を思い出しました。

いま着ているものより，もっといいものが着たい
今日の食事より，もっとすてきな食事がしたい
現在の家よりも，もっと広いところに住んでみたい
もっともっといい暮らしを
そのことが父親の頭の中にいっぱい
そのことが母親の頭の中にいっぱい
子どもに友だちが一人増えたことを知らない
もう一人の子どもが新しく覚えた遊びを知らない
二人の子どもも話さない
四人ともそれぞれの時間が増えていく
その分，向かい合うお互いの時間が減っていく
一番身近にいる人の本当の悩みも，喜びも，苦しみも気づかなくなっていく
いつもすぐ近くにいる人の本当の姿が見えなくなっていく
愛のスタートは家族
本当に愛して家族，本当に愛されて家族

この言葉をそのままの意味で捉えても，私の心に訴えるものがありました。シルバーナさんのレッスンを見て，また少し捉え方が変わりました。

今より，よい服，よい食事，よい家を目指す親は，きっと子どもたちのためと思っているのでしょう。でも，「その先に目指すもの」を忘れてはいけないよ，見失ってはいけないよということなのではないでしょうか。よい暮らしを目指すのは，きっと子どもたちと楽しく暮らしたいという目標があるからかもしれません。つまり,「その先に目指すもの」は,「子どもたちの笑顔」かもしれません。その「子どもたち」を「よく観察する」ことを忘れて，目先の目標ばかりに捉われないでとマザー・テレサは言っているのではないでしょうか。

図工で無理やり置き換えると，よい暮らしは,「みる・かく・つくる力」でしょうか。そればかり求めてしまうと，結局，目の前にいる子どもたちが見えてこなくなる。しかし，シルバーナさんは,「その先に目指すもの」がしっかりと見えている。だから，発する言葉にも一貫性があり，目の前の子どもたちもよく見ているのではないでしょうか。

図工の授業を考えるのに,「生き方」まで考えるなんて大げさな, という意見もあると思います。しかし,「その先に目指すもの」なしには，具体的な授業の方向性も言葉も定まらない。現場で子どもたちの対応に，とっさになんて言ってよいか悩むばかりだと思うのです。（片付け本を書いた近藤麻理恵さんも，理想の生活を思い描かなくては，片付けをしても，リバウンドしてしまうと書いてありました。）

なぜ，シルバーナさんのレッスンを見て，マザー・テレサの言葉を思い出したかというと，我が子への接し方に悩んでいたからです。いくら，○○は言わないなど，マニュアルのような目標を立てていても，我が子のいたずらや暴言を前にした「イライラまゆこママ怪獣」には簡単に踏みつぶされ，子ども以下の暴言を吐いてしまう自分に悩んでいたからです。「その先に目指すもの」がないので，目先の感情やイライラに押しつぶされてしまっているのです。

根本に戻って，子どもにどんな人になってほしいのか，はたまた，自分はどんな生き方をしたいのか，そういうことをじっくり考えたことがありませんでした。この機会にぼんやり考えてみようと思いました。

今の自分や周りの大切な人の状況をよく観察し，「（大げさなものではありませんが）生きる目標」と照らし合わせて自分なりの「マイ・ルール」を作っては，やってみて，また作ってみて…を繰り返していきたいと思います。いつか，「マイ・ルール」が「イッツ・マイ・ライフ」と言える日を目指して…

3. 『共に考える仲間～もう戦わなくていいよ』

シルバーナさんから学んだこと３つ目です。
最初の図工室で，シルバーナさんは，浮かない表情のまりんちゃんに「楽しんでる？」と傍らに座り，優しく背中を撫でていました。それだけでまりんちゃんは，安心だったでしょう。また，まりんちゃんの作品に対してコメントした後，「刺激を与えていきます。」と言っていました。素晴らしいと思いました。上からの視点でも，下からの視点でもなく，「傍ら」の視点だなと感じました。レッスンを通じて，先生と子ども，その親といった関係ではなく，子どもも親も日本で新しく出会えた仲間のような雰囲気を感じました。共に教え，教えられる関わりです。また，子どもたちに何かを話すときは，いつも輪になって座

っています。これも仲間としての意識の表れだと思います。

シルバーナさんのレッスンを見ながら，大村はまさんの「優劣のかなたに」という詩を思い出しました。シルバーナさんが，「風がふいてきた」と言って，他の人が描いていた絵の続きを描くというシーンがありました。子どもたちは，友だちの作品に続けて描くことに抵抗がなかったように見えました。自分の領域という壁はなく，○○をみんなで作り上げるぞといった意気込みのある「作品」という枠組みそのものもないような世界でした。「五感を使って観察した草や花を前回，習得した技術で描く」，「友だちと共に描く」という「瞬間」や「行動」がある。儚くも，しかしそれでいてとても広い世界が広がっているように思いました。男の子が「融合したぜ」といった言葉も印象的です。友達の作品に刺激をもらい，自分もまねしてみたり，付け加えてみたり，新たに生み出してみたり，はっきりとした境目はありません。しかし，子どもたちは，よく観察し，考えて表現しているのです。まさに，どちらかが，優だ，劣だと争う狭い世界ではないと思いました。

ずいぶん前，対話型鑑賞のアメリア・アレナスさんのワークショップを受けたとき，現職の先生の一人が，「評価はどのように考えたらよいですか。」という質問したことを思い出しました。アレナスさんが，「評価なんてしないといけないの？」と返しておられたのをよく覚えています。アレナスさんも「その先に目指すもの」がよく見えていて，子どもをよく観察すればよいことで，○，×をつけることになんら意味はないと考えておられたのでしょう。現実的には，私たちは学校現場で評価をしないといけません。しかし，授業は，「評価のためのテスト」なのか，「子ども」のためなのか，多忙の中，見失いがちではないでしょうか。もし，評価のための授業であれば，その「評価」が子どもたちを逆に狭い世界に追いこむと思います。子どもたちは，他の人と交わることを目指すのではなく，自分の領域に入りこみます。そうなると他の人は敵，図工の時間も孤独な戦いを強いられます。「オリジナルをつくりなさい。」「自分だけの発想で考えなさい。」という戦いを。

なぜ，評価するのか，何のための評価なのか，洗い出し，無意識にしていたことをよく観察します。するとまた，何を目指すのか･･･やはり，考える先は，「目指すもの」のようです。

またまた子育ての話になりますが，私も我が子をいつの間にか，敵視し，イライラまゆこママ怪獣を敵視し，必死に戦っていました。それは，「いい子でいないといけない，いいママでないといけない」という無意識の思い込みが「目先の目標」を作ってしまい，自分の中でいけなかった，悪かったと反省ばかりしていまいした。「その先に目指すもの」が見えていませんでした。子育ては，孤独ではない。子どもはパートナー。図工でも同じかもしれません。何か（仮想「悪い授業をする敵」）と戦っていたように思います。でも，戦いながら，自分は誰のために，何のために戦っているのかを見失っていたのです。

最初の図工室での課題は，「より高く積み上げた方が勝ち」というものでした。まりんちゃんの表情は，孤独の中，戦っているようにも見えます。もう戦わなくていいよ。まりんちゃんと同じく，私もシルバーナさんにそうそっと教えてもらった気がします。

4. 『こんな時間が私の人生にあるなんて・・・わたしもいていい。あなたもいていい。』

「こんな時間が私の人生にあるなんて・・」シルバーナさんが，子どもたちとその家族とお花見をしていたときにつぶやいていた言葉です。この出会いに感謝しているような言葉です。ちょっと大げさかもしれませんが，ありがたいなあ，こういう運命って不思議だな，生かされているな，という思いも想像できます。「私もいていい。あなたもいていい。」他者を尊重し，同時に，自己肯定感がにじんでいます。

シルバーナさんのこの言葉はどこから来るのか。この自己肯定感はどこから来るのか。これは想像するしかありませんが，自分がしていること，考えていること，選択したことに，納得していて，自信があるということでしょう。まさしく，シルバーナさんが，レッスンの中で発した考えそのものを自分自身が体現しているようです。よく観察し，自分の頭で考え，実行し，発見し，学ぶ。さらに修正を加えて，実行していく。その中で自己肯定感を育んできたのでしょう。自分を大切にできて，初めて他者を大切にできるということが，シルバーナさんの言動を見ると納得します。

子どもたちの様子からも影響が伺えます。穴の開いた画用紙に絵を描くシーンに出てきた「たくとくん」の言葉です。「自己ベスト！」と言って，とても自分の作品に満足げでした。どうして，「自己ベスト！」だったのか。よく観察し，ひらめき，試すということは，自分で判断し，選択するとも言い換えられます。試してうまくいかなければ，また現状を観察し，また試す。レッスンの中でこれを何度か繰り返したことで，自分の作品も客観的に見ることができるようになってきたと思います。また，自分の「選択」に心地よさや，納得感，満足感などを感じ，自信が生まれたのではないかと思います。シルバーナさんが褒めていなくても，彼は，きっと「自己ベスト」だと言ったのではないかと思います。

このたくとくんの姿こそ，図工の教室で見たい姿の一つだと思いました。

まとまりきれていませんが，以上で終わりです。

文章力のなさから，分かりにくい文章になってしまました。申し訳ありません。読んでくださっただけでもありがたいです。感想文は，あまりよいものはできませんでしたが，若元先生のおかげで，図工だけでなく，自分の子育て，ひいては，生き方まで考えるきっかけになったことは間違いありません。ほんとうにほんとうにありがとうございます。DVD を送ってくださってから，こんなに長い時間がかかってしまい申し訳ありませんでした。若元先生が書かれた文章をとても楽しみにしております。また読ませてください。これから少しずつ寒くなりますが，ご自愛ください。

言うまでもなく私の言説を凌駕し“杞憂”を吹き飛ばしてくれる文面である。その田中真由子は，まぎれもなく我が国の教員の一人であり，我が国にもこうした若く優れた教員が居る事実に一縷の望みを託し，美術教育への誤解から脱却し適正化がゆっくりとでも着実に進化（深化）・発展することを願ったことである。

まとめ

幼児・児童・生徒等を対象にする美術教育において，表層的な“作品の変化”を求める取り組みから脱却“子どもの変容”につながる実践の構築を望みたい。以下，あえての繰り言。シルバーナの実践を単に作品を「かかせ･つくらせる」ための「マニュアル」におとしめてはならない。「マニュアル本」等に依存する体質のままでのムナーリ・メソッドの導入は断固否定する。18 年間我が国の美術教育につかってきた学生たちの姿をみるにつけての所見である。

教員等の美術教育の“根っこ”の誤解からの解放こそが我が国の美術教育上の最大課題ではないか。であればこその厚顔にての我田引水である。私の“スタンダード”及び拙著“五七五 de 美術教育”を俎上に載せ，なぜ，子どもたちに“みる・かく・つくる”活動を求めるかについての再検討・再構築を願うのみである。

美術（図画工作）科等担当者スタンダード（私案）／2012.11.1. 改訂

	Heart/Head/Hand 感じる力/考える力/みる・かく・つくる力	Memo （註）
「美術の教育」の具現 **〈Education for Art〉** **自分流** **みる･かく･つくるを 遊ぶこと**	□“美術（アート）*a”について子どもたちに分かりやすく説明できる。 □学習指導要領等（幼稚園教育要領，保育指針）に示された「内容*b」について過不足なく理解し指導内容・方法を構築できる。 □教科書等に掲載されている材料・用具の質や量，あるいは技法等に関する情報提供，五感覚総動員授業*cを保障し技術・技能を無理なく*d身につけさせることができる。	*a 学習指ps導要領（「解説」も含む）や小学校（図画工作科）及び中学校（美術科）の教科書に掲載されている事項等については説明できる。 *b 「内容」は，“美術（みる・かく・つくる）”を指し，子どもたちにとって心象表現，目的表現，造形遊びあるいは鑑賞がどのような意味をもつかの説明ができる。指導にあたっては正反対のスタンスを求められる場合もあり子どもへの作用をふまえた指導を構築できる。 *c 人間形成（脳形成）への展望をもち，子どもたちが，より多く感じ(視，聴，嗅，味，触の五感／脳の営み)，より多く考え（脳の営み），より多様な活動を心おきなく展開できる支援（造形環境の保障）ができる。 *d 単に作品づくりに向かわない「造形遊び」等を積極的に取り入れ義務教育９年間を見通し教師の我流（自分の好みレベル）ベースの技術・技能の強制等は回避できる。
「美術による教育」の具現 **〈Education through Art〉** **表現と 鑑賞通し 人つくる**	□「表現及び鑑賞の活動を通し，…」で起こされる教科目標の「通し」の含意*eを反映した授業を構築できる。 □美術教育の本質的目的が「感性」や「情操」レベルにとどまるものでないことを認識し“情操教科”や“実技教科”との文言に依存しない見識*fをもつ。誰のため，なんのための美術教育かを不断に追究できる。 □美術教育の究極的目的は人間形成（脳形成）であることを認識し，作品主義を排し過程重視*gの評価を具体化できる。	*e “美術による教育(Education through Art)”の確認を基盤に，学校に美術教育が在ることの意味を人間形成の視点から子どもたちに説明でき授業で具現できる。 *f 我が国には“主要教科”との不適切文言がある。“情操教科”等も不適切文言の一つ。美術教育の位置づけをそうした低レベルでとらえて安心することを否定し，美術を通して〈Education through Art〉感じる力，考える力，みる・かく・つくる力を形成することを本質とする見識。 *g 作品をつくらせることが最終目的ではない。学校等における美術教育の目的は人づくり。作品の出来映え（作品主義）にこだわる教師達のおおくは美術及び美術教育への理解が浅薄。「山は山らしく花は花らしく」からの脱却こそ肝要。
「新3H美術教育」の具現 **ドロシー*hと** **思いは一つ 子（個）の支援**	□子どもたち個々の営みをみきわめ，賞揚・叱咤激励等，適切な「ほめる，はげます，ひろげる（新３H）」営みができる。 □教師のイメージを押しつけ求めさせる指導*iを否定し子どもたち自身の想を拡大できるような発問や材料の準備ができる。	*h「ドロシーと 思いは一つ 子（個）の支援」と詠んだのは，私の求めるスタンスが「子は親の鏡／ドロシー・ロー・ノルト『子どもが育つ魔法の言葉』PHP研究所，2000年」に重なり美術にかかわる教員等にはとりわけこのスタンスを要求したいと考えるからである。 *i 教科書の作品のようにとかコンクールで受賞したような絵（作品）のように描く（つくる）ことを安易に子どもたちに求める指導の否定。
「3M*j美術教育」の具現 **評価とは** **見極めてこそ 子（個）にかえる** **教師道** **見極めることと みつけたり**	□子どもの現状（実態）をきちんと把握できる。 □作品の「出来映え（うまい・下手）」ではなく取り組み過程を*kみつめ・みまもり・みきわめて後，過程を重視した確かな評価ができる。	*j ３Mとは「みつめる・みまもる・みきわめる」を指し，教育営為の基本。子どもの「いま」を確実に把握する。これがなければ個々の子どもたちへの適切な「手だて」は発生しない。まず「みつめる」，即決即断をせずしばらく「みまもる」，そして慎重に「みきわめ」適切な「手だて（ほめる・はげます・ひろげる等々）」を実行する。 *k みる・かく・つくるプロセスでのがんばりや踏ん張りを見極めた評価により子どもたちはそのことの意味・大切さを体感し人間力への連鎖が期待できる。
造形環境*lの整備 **支援とは** **心にかけても*m 手はかけぬ*n**	□「支援とは 心にかけても 手はかけぬ」を鉄則に，子どもから筆をとりあげ，子どもの作品に教師の筆を入れる等の愚行を回避できる。 □題材開発・教材研究等，不断の展開は当然*oのこととし必要に応じて複数の参考作品（サンプル）等を制作（製作）できる。	*l 造形環境には「可視（場・材料・用具）造形環境」と「不可視（人・時間・情報）造形環境」がある。詳細は，若元澄男編「図画工作・美術科重要用語３００の基礎知識」,明治図書,2000.8,pp200-206 *m「心にかける支援」とは子どもの実態を見極め過不足のない造形環境を準備すること。その環境の中で子どもたちは多様な活動を展開しそのプロセスでの育ちを期待する文脈。 *n 「手をかけぬ」とは子どもの作品に教師の思い込みで手を入れる等の行為の全面否定であり最も回避すべきこと。「鑑賞の指導」においても「みかた」への介入等要注意。 *o 題材の教材研究段階における試作等は不可欠。子どものつまづきなど想定でき,安全指導のポイント等の確認となる。
「もまた魂」の具備 **肯定も** **否定*p,q もまた*rね 視野に入れ** **めだかもね** **すずめもまたね 是々非々*sで**	□美術教育における「不易（本質的課題）」を見失うことなく「流行（現代的課題）」「も」ふまえつつ子どもたちに適正な美術教育（題材開発，授業）*tを提供できる。 □表現（心象表現，目的表現，造形遊び）及び鑑賞のいずれ「も」欠くべからざる内容として認識でき，美術の自由性*uを生かした授業を構築できる。	*p,*q 江崎玲於奈氏の知見。「肯定命令プログラム」における授業時の教師の発問の語尾は「〇〇しましょう」が主流となり，「否定命令プログラム」は「〇〇してはいけません」となる。いずれの発問がより多くのことを考えなければならないかと，アメリカの教育プログラムと日本のそれを比較したうえでの江崎氏からの我が国の教育システムへの問題提起であった。 *r 「もまた魂」は教師の柔軟性を求める視点。「みんなちがってみんないい」の視点の具備と言い換えることもできる。許容（受容）的雰囲気（環境）の中でこそ子どもたちは心をひらき，頭を働かせ，自ら手を動かす。このプロセスで子どもたちは様々なことを自ら学び取る。 *s 「めだかの学校」は子どものペースを重視する授業の様子を象徴し，「すずめの学校」は教師主導で展開する授業の様子を象徴する。是々非々とは，誤解を恐れず言うなら，心象表現や造形遊びの指導は「めだかの学校」のようにありたく，目的表現の指導は「すずめの学校」がより適切なケースが多いだろうということ。 *t 具体的には学習指導要領等の過不足を指摘でき改善案を提案できる。 *u 「みんな違ってみんないい」，「自分流 みる･かく･つくるを 遊ぶこと」等，美術の自由性をベースにした授業の構築ができること。「正解がない」教科ではなく，十人居れば十通りの結果を受容できるスタンスを維持できる。

※ 拙著「五七五 de 美術教育」は，http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hijiyama-u/list/creators/にアップされております。アクセスくだされば「脚注＊a-u」や「本文」等，とりあえずは，拡大してご確認いただけます。なお，私方にご請求いただければ，拙著，よろこんで謹呈させていただきますこと申し添えます。